

総合的な学習の時間における思考力育成の手立てについての研究

國重 裕美^{*1}・藤上 真弓

A Study on the Development of the Ability of Thinking in the Period of Integrated Study

KUNISHIGE Hiromi^{*1}, FUJIKAMI Mayumi

(Received January 6, 2016)

キーワード：探究的な学習、思考ツール、思考力育成、活用

はじめに

大きな成果を上げている学校がある一方、「活動あって学びなし」と言われてしまいがちな総合的な学習の時間の学びを充実させ、子どもたちの思考力を育成しようと呼び、「イメージマップを使って、考えを広げる」「座標軸の入ったワークシートや模造紙で情報を整理する」「ベン図を使い、情報を整理・分析し、共通点や相違点を明らかにする」など、「思考ツール」の活用が積極的に行われるようになってきた。今、総合的な学習の時間が創設されてきた時期の学びの中では、あまり着目されてこなかった収集した情報を分析・整理するための具体的な手法や教師の発問等について吟味していくことの必要性が叫ばれている。

思い起こせば約10年前、筆者¹⁾が、総合的な学習の時間が完全実施されるようになった5年目、平成18年の山口大学教育学部附属光・中学校の初等教育・中等教育研究発表大会において、授業提案した後に、指導者から「総合的な学習の時間の授業において、発問や授業デザインについて提案しているところが、これまでにない。これからは、総合的な学習の時間の単元の中においても、子どもの学びがステージアップしていくための具体的な手立てに着目していく必要性を感じた。」とコメントをもらった。しかし、各学校に運営の仕方が任されている総合的な学習の時間においては、創設されて間もないこともあり、「どのような単元を開発するか」「単元の中でどのような体験を設定するか」ということに対する吟味に時間や力が注がれがちであった。そのため、現行の「学習指導要領解説総合的な学習の時間編」（文部科学省、2008）には意識して単元デザインすることが明記（p.13）されている「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」の流れの中の「整理・分析」の時間が確保されなかったり、「整理・分析」の方法を子ども任せにしてしまったりしている授業も多く見られた。その後も、ある程度のカリキュラムが決定したら、その単元を「こなす」という流れになってしまっている現状に対して、悩みを抱えたままの学校もある。また、総合的な学習の時間の取組に対する校種間、学校間、教師間の格差も指摘されてきた。

そういった現場の悩みや課題を解決し、総合的な学習の時間の充実・発展を願って出版された「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開小学校編」（文部科学省、2011）においても、「思考ツール」を使った事例が掲載されている。例えば、自分の市の特色となっているものの維持・発展に対する「自分たちの思い」と「地域の人の思い」の「共通点と相違点を明らかにする」ために、また、地域のバリアフリーについて、「自分にとって」「幼児にとって」「高齢者にとって」という視点から分析し、誰にとってもバリアフリーとなっている「共通点を見いだす」ために、「ベン図」を活用した事例（p.36）や、子どもが考えた活動の「良い点」と「悪い点」を浮かび挙がらせるために、「メリット・デメリットの視点で分析・整理する」ためのシートを活用した事例（p.35）などである。

「思考ツール」を活用することで、子どもたち一人ひとりの内面にある思いや願い、見方・考え方、自分たちが今もっている情報が見える化されていくという効果がある。また、整理・分析場面において、「この情報から何か気付いたことはありませんか」「分析してみましよう」などといったような教師の曖昧な投

*1 山口大学教育学部附属光小学校教諭

げかけを受け、這い回りがちだった活動や議論が、焦点化されていく。そのため、子どもたちは、何について、どのように整理・分析していったらよいかという見通しをもって活動を展開することができるという効果がある。「思考ツール」の活用は、総合的な学習の時間の学びを充実させるために成果を上げつつある。しかし、目的との整合性を子どもたちがどの程度把握して活用しているか、子どもたちの必要感のもとに活用が促されているのかどうかという点においては、課題が残る授業も少なからずある状況である。

そこで、子どもたちに多様な「思考ツール」を発達段階や実態、課題に応じて活用させ、それらを課題に応じて使いこなせるものとして、子どもに蓄積させていくことが必要であると考えた。そのためには、子どもたち自身が、必要感をもって「思考ツール」を活用したり、その「思考ツール」を活用せざるを得なくなったりするための手立てを模索していく必要を感じた。そして、何よりも、子どもたちが「思考ツール」を活用する効果を実感しない限り、子どもたちが今後、課題解決場面にふさわしい「思考ツール」を必要感に応じて使いこなしていく状態にはならないと考えた。

1. 実践の概要

現代社会は、容易には解決に至らない課題が多いと言われている。答えが一つには定まらず、解決することが難しい課題が溢れている、そのような現代社会において、仲間と共に、よりよい解決方法を求めていく力が必要であると考えた。なぜなら、複合的な要素が入り組んでいる問題を一面的にとらえるだけでは、よりよい課題解決の方法を見いだすことはできないからである。

そこで、本校の総合的な学習の時間では、かかわり合いの中で協同的に見いだした視点を生かし、今後の活動の方向性を主体的に定めていく子どもの姿を目指していくことにした。具体的な例を挙げて、そのような子どもの姿を紹介する。「おじいちゃん、おばあちゃんこんにちわ」という、第3学年での実践である。

この単元では、学校近くのデイサービス施設を利用されている高齢者との交流活動を設定した。高齢者の方々とふれ合うことで、子どもが、相手に寄り添い、共に生きていくことの大切さを見いだすことができると考えたからである。

子どもたちは、何度かの訪問で、昔のおもちゃで一緒に遊んだり、指や口の運動を行ったり、また、おやつ準備を手伝わせていただくこともできた。高齢者の方々とたくさん交流をさせていただく中で、子どもたちは、「もっと元気になってもらうために、ぼくたちも何かしたい!」という思いや願いをもつようになった。ある子どもは、こまを一緒にまわした活動を振り返り、どんぐりごまで遊ぶ計画を立てた。そして、その計画を設定した理由を、図1のように書いた。

自分が楽しいことに重きを置いて、計画を立てようとしていることが伺える。

教師は、計画の内容が、一緒に活動する高齢者の方に合ったものになっているかを検討させるために、友達と計画内容を吟味する場を設定した。友達とのかかわり合いの中で、子どもたちは、自分とは異なる見方・考え方にふれ、高齢者の好みや体のことも考える必要性に気づき、それらを、誰かのために計画を立てる際の視点としてまとめることができた。

語り合いの後、先ほどの子どもは、見いだした視点を基に、図2のように自分の計画を見直していった。

ここから、かかわり合いの中で協同的に見いだした視点を生かし、今後の活動の方向性を主体的に定めていく子どもの姿が伺える。そして、そのような子どもは、自己のよりよい生き方を探りながら、これから進む未来を仲間と共に切り拓いていくことができると考えた。

小村さんは、どんぐりごまを作ったことがないかもしれないから教えてあげたい。自分たちもおもしろいから、小村さんもきっと楽しいと思う。

図1 語り合い前のA児の記述

小村さんは指の運動のときに動かさにくそうだったから、指のことも考えたプランにしようと思う。楽しんでもらっても元気になれるけれど、相手の体のことも考えたプランにすると小村さんか、もっと元気になると思う。

図2 語り合い後のA児の記述

2. 研究の実際

本研究は、第24回全国小学校日本生活科・総合的な学習教育研究協議会香川大会、課題別分科会において、筆者2)が、口頭発表した実践についてまとめたものである。

2-1 単元について

2-1-1 単元の目標

まず、この単元では、大きく二つの単元目標を設定した。一つ目は、資源の有効活用に取り組んでいる人や、活動を共にする友達と進んでかかわりながら、資源の大切さや有効活用する方法を伝えるための「エコフェスタ」を開くことができるということである。単元の最終目標として、広報活動を行った。二つ目は、その過程において、資源の大切さや有効活用する方法について様々な視点から語り合い、自分なりの、資源を大切に作る生活の在り方を見いだすことができることにも重点を置いた。

2-1-2 単元の構成

単元全体を見たときに、「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」という大きな流れを意識して単元をつくらせている。図3は、具体的な単元の構想である。

単元を構想した段階では、一回目と二回目のエコフェスタの内容がどのように変化するかということはいくまでも予想でしかなかったが、大きな活動を一回で終えるのではなく、その成果や課題からさらによりよいものを目指していってほしいと考え、第二回エコフェスタを集大成のものとして位置付けた。

第一次：身近にある資源のよさや課題について調べる 第二次：資源を有効活用する方法を探り、エコフェスタを開く 第三次：フェスタの成果や課題をまとめ、「ごみを減らそう」と思ってもらうための広報内容の計画を立てる 第四次：第二回エコフェスタを開き、活動を振り返る

図3 単元の構成

2-1-3 研究の視点・方法

今回この単元において、特に重点的に取り組んだ活動が二つある。一つ目は、課題解決に必要な視点を見いだす活動である。これは、先ほど例にも示した「おじいちゃんおばあちゃん、こんにちは」の単元と同様、かかわり合いの中で協同的に見いだした視点を生かし、今後の活動の方向性を主体的に定めていく子どもの姿を目指した。しかし、そのためには、かかわり合いを充実させる必要性があった。

そこで、今回の単元では、自他の見方・考え方をつなぐ活動も取り入れた。これが、重点的に取り組んだ活動の二つ目である。かかわり合うために必要な視点や方法を子どもたち自身が身に付けることで、課題解決に向けての深い吟味を促し、よりふさわしい視点を見いだすことができるのではないかと考えたのである。

この二つの活動については、第三次の場面で詳細を示す。

2-2 単元の流れについて

2-2-1 第一次：身近にある資源のよさや課題について調べる

単元の導入として、ごみ問題に対して強い思いや願いをもっている方との出会いの場を設定した。光市役所環境部環境事業課梅田暁一さんである。梅田さんから、市内のごみの量や分別の仕方を教わった。「誰か一人だけが努力しても解決しない。みんなで協力して地球のごみを減らしていこう。」という言葉に、ごみ問題に尽力されている方の強い思いや願いを感じ、子どもたちは、自分自身の生活を振り返った。

その振り返りに多く書かれていたのが、“もったいない”という言葉であった。しかし、「もったいないとは、どういうことか。」と聞くと、その答えは子どもの中でも曖昧だということが分かった。そこで、まずは、全校にも協力を呼び掛け、身近にある、もったいないと思うものを集めることにした。

そして、クラスみんなで意味を共有した言葉についてまとめていく「四ノ壺言葉辞典」に、“もったいない”の意味を掲載することにした。

集めたものを整理・分析し、話し合った結果、「“もったいない”とは、使い切っていないのに捨てようとしていること、必要以上のものを買ったり使ったりしていること」とまとまった。このように既存の言葉

であっても、自分たちなりに再解釈を行い、実感を伴って認識していく過程が大切だと考えている。そうすることで、「もったいないものを減らすために、どうすればよいか」という次の課題に、仲間と共通の認識をもって向かっていくことができた。

2-2-2 第二次：資源を有効活用する方法を探り、エコフェスタを開く

もったいないものを減らすためにどうすればよいかという課題に対して、解決方法の見通しをつくるきっかけとなったのは、休み時間にもったいないものを見ていた子どもが、「骨が折れてしまっているから傘としては使えないけれど、布はまだ新しいよ。」とつぶやいたことであった。「確かにもったいないね。」という言葉が自然と生まれた瞬間であった。

このように、身の回りにもったいないものが溢れている現状に問題意識をもった子どもたちは、「もったいないものを、使えるものに変身させたい」という思いや願いをもち、資源を有効活用する方法を探り始めた。いつのまにか、子どもたちにとって、もったいないものがごみではなく、宝の山に見えてきていたようだ。

傘の布を使った子どもは、デザインの可愛さを生かした写真立てや、防水性を利用した携帯電話ケースを作った。そして、変身させたものをみんなに再利用してもらうためにエコフェスタを開くことにした。



図4 傘の布を使って有効活用する方法を探る子どもと、その完成品

商品を改良する際には、エコフェスタでどのような商品を出すかということ話し合い、そこで得られた視点(図5)を基に、子どもは、自分の商品をよりよいものへと工夫していくことができた。

また、どのようなエコフェスタにしたいかということについて語り合い、共通の目標として、「変身した商品を喜んでほしい」「みんなに買い物を楽しんでほしい」「『リサイクルしたい』と思ってほしい」の三つにまとめた。このように、共通の目標をもっておくことで、準備の段階においても、目標に照らし合わせてよりよい行動を判断でき、振り返りの際にも、観点として活用することができた。

他にも、光市で行われている「ひかりエコフェスタ」の担当の方に話を聞いたり、資源の有効活用に取り組んでいる施設や店を調査したりしながらエコフェスタに向けて準備を行った。驚いたことに、子どもたちは、エコフェスタを紹介するためのポスターや、商品を展示する道具まで、もったいないものでつくっていた。図6の写真に写っているのは、実は折れてしまった傘の骨なのである。そして、ついにエコフェスタ当日を迎えた。

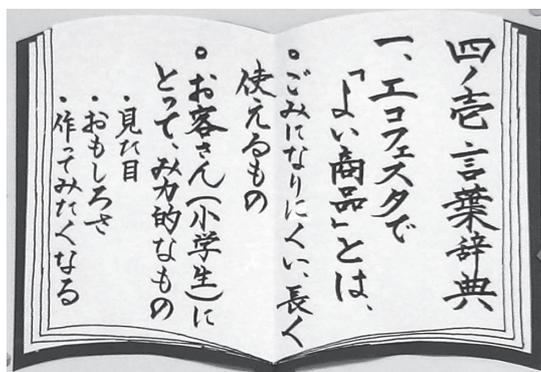


図5 商品改良の視点



図6 フェスタの様子

2-2-3 第三次：フェスタの成果や課題をまとめ、「ごみを減らそう」と思ってもらうための広報内容の計画を立てる

フェスタを大盛況に終えた子どもたちは、満足気な表情で、「楽しかった!」、「喜んでもらえた!」と感想を語り合った。しかし、不十分さを感じている子どももいた。

そこで、自分たちの思いや願いがどのくらい伝わったかを一人ひとりに数値で評価させ、その結果を、全員で整理・分析することにした。

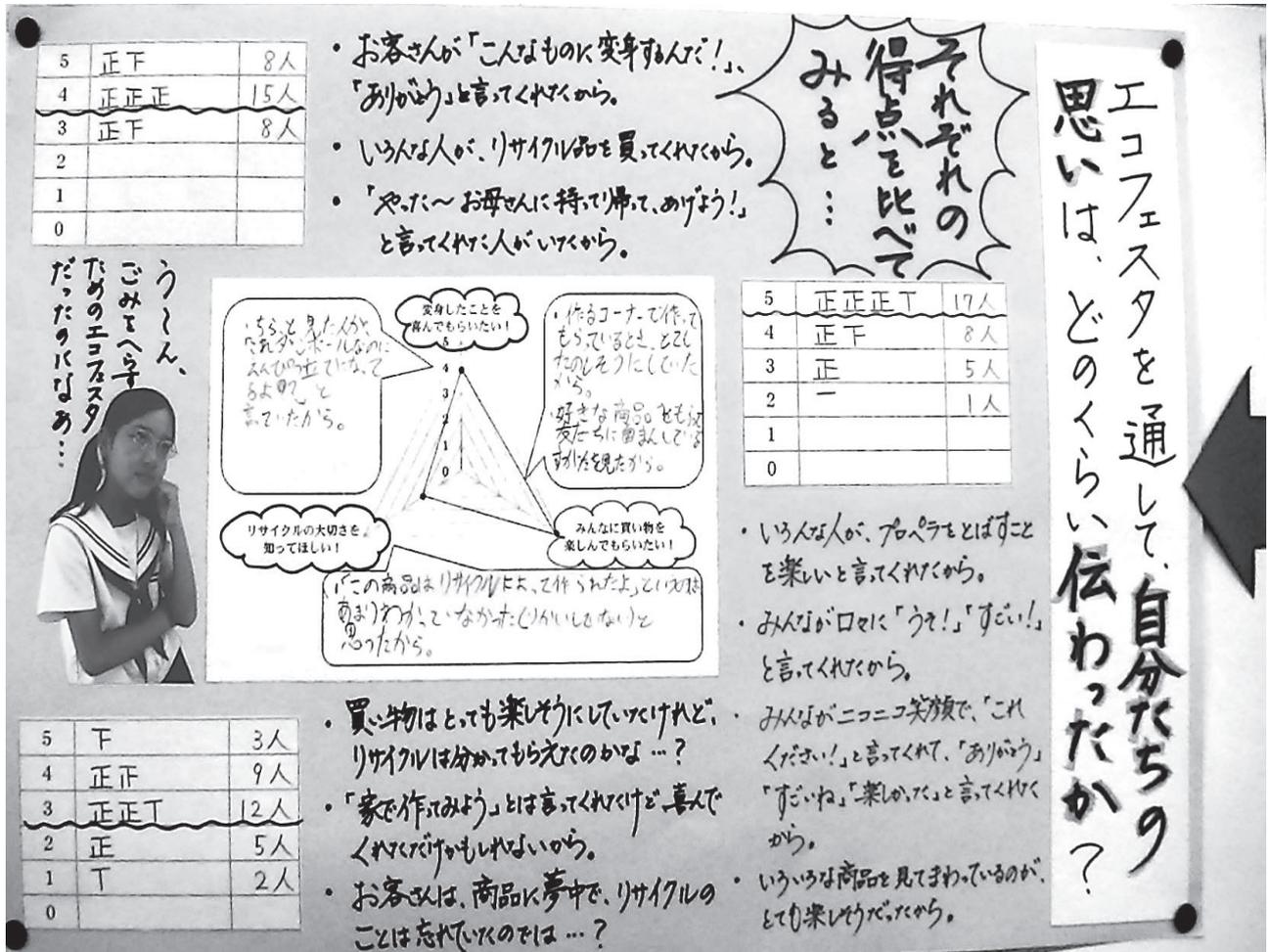


図7 一人ひとりの評価を整理・分析した結果

エコフェスタという大きな活動を通して得ることができた成果や課題を、明確にする必要があると考えたからである。今回は、共通の目標として掲げた三つを振り返りの観点とし、レーダーチャートを用いて、評価をさせた。全員の評価をまとめると、「フェスタそのものは楽しんでもらえたけれど、ごみを減らすという課題を解決するためには、さらなる工夫が必要である」と気付くことができた。そこで、第二回エコフェスタでは、参加者に「ごみを減らそう」と思ってもらえる広報活動を行うことになった。

子どもたちは、より多くの人に自分たちの思いや願いを伝えるために、分担して伝える相手を決め、その相手に合った広報内容を選ぶことにした。子どもたちが選んだ相手は、幼児や1・2年生、中学生など、身近な人たちであった。

これまでにどんな情報が集まっているのかを整理し、相手に「ごみを減らそう」と思ってもらえるだろうと感じた内容を、一人三つ選んだ。図8は、子どもたちが選んだ広報内容の例である。

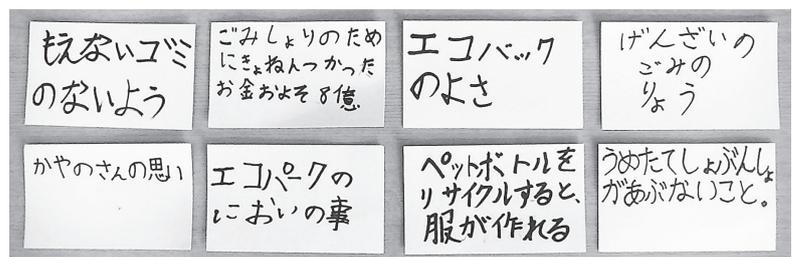


図8 子どもが選んだ広報内容の例

2-2-4 自他の見方・考え方をつなぎ、課題解決に必要な視点を見いだす活動

ここで、広報内容にどの情報を選ぶとよいかという課題解決のために、自他の見方・考え方をつなぎ、課題解決に必要な視点を見いだす活動を仕組んだ。子どもたちは、それぞれに根拠をもって広報内容を三つ選んでいるものの、その根拠を語り合うだけでは、なかなか、互いの見方・考え方のよさや課題を探ることはできない。ましてや、それらの見方・考え方を、課題解決に必要な視点として見いだしていくことは、大変難しいことである。

そこで、本單元では、まず、自他の見方・考え方をつなぐ活動として、四人グループで、広報内容を再吟味する活動を設定した。そのときに用いたのが、「序列化して考える」という思考方法である。つまり、広報内容を比較したり分類したりしながら、よりふさわしい広報内容を選ぶ視点を見いだすことができるようにしたのである。大きなホワイトボードに三角形を描き、三つの階層に分ける。「ピラミッドチャート」という「思考ツール」の考え方を生かしたものである。自分たちが選んだ広報内容を一番下の層に貼り、ふさわしいと考えたものを上位層へと挙げていった。中間層があるのは、悩んだ過程を見えやすくするためである。子どもたちは、ふさわしさの根拠を語る中で、多様な見方・考え方を表出させ、その中でも納得できる見方・考え方を視点として、ファイルカード(図11)に記していった。

もちろん、このような方法はツールの一つにすぎないが、子どもたちは、この活動を通して、「比較する」「分類する」「関連付ける」「類推する」などのものの見方や考え方を、総合的に活用していくことができた。

それでは、各グループで、どのような語り合いが行われたのか、ホワイトボードの記述をもとに説明する。図9は、幼児に向けて広報活動を行うグループのホワイトボードの記述である。

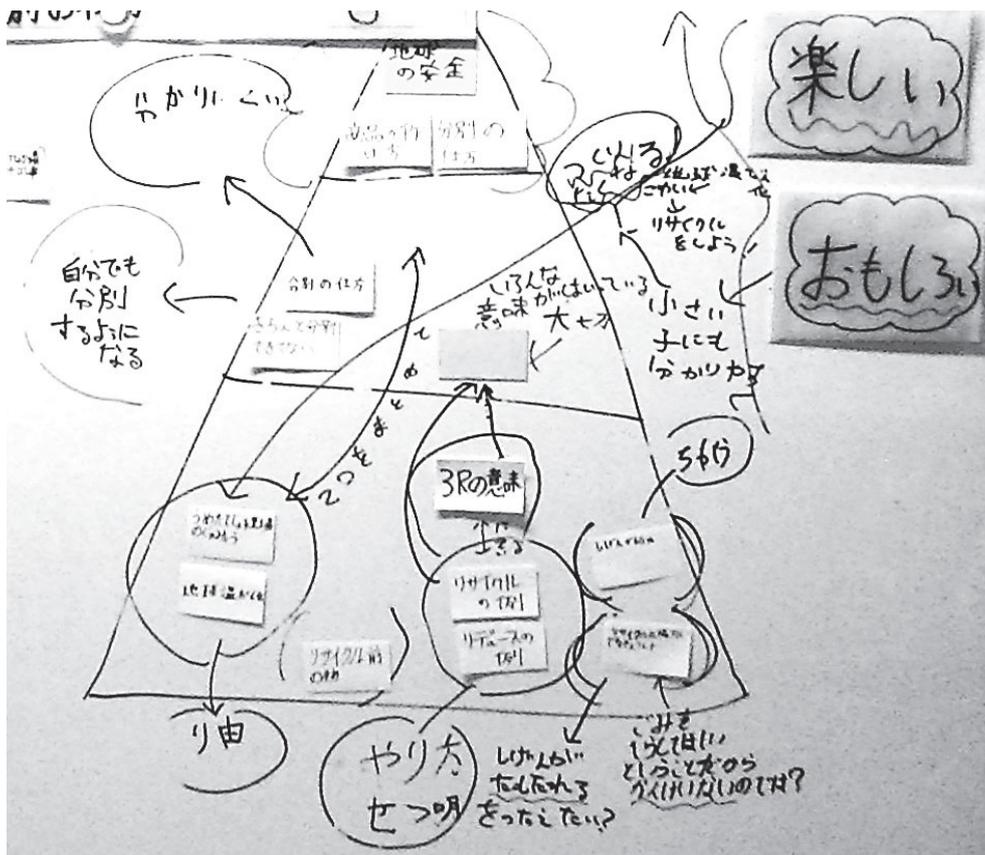


図9 幼児グループのホワイトボード

このグループでは、まずは埋め立て処理場の寿命やごみを処理するのにかかる費用など、ごみが増えることによって起こってきた問題を取り上げていた。しかし、それらの情報は幼児にとっては分かりにくいのではという意見が出され、「幼児に伝えるべき広報内容とは何か」ということが語り合いの中心となっていた。その結果、分別の仕方やリサイクル商品の作り方など、「相手に『楽しい』『おもしろい』と思ってもらえる情報を選ぼう」という結論に至った。このように、このグループでは、「相手に合わせて」という意

識が必要な視点への獲得へとつながった。

一方、図10は、自分たちよりも年齢が高い中学生を広報活動の対象としていたグループのホワイトボードの記述である。

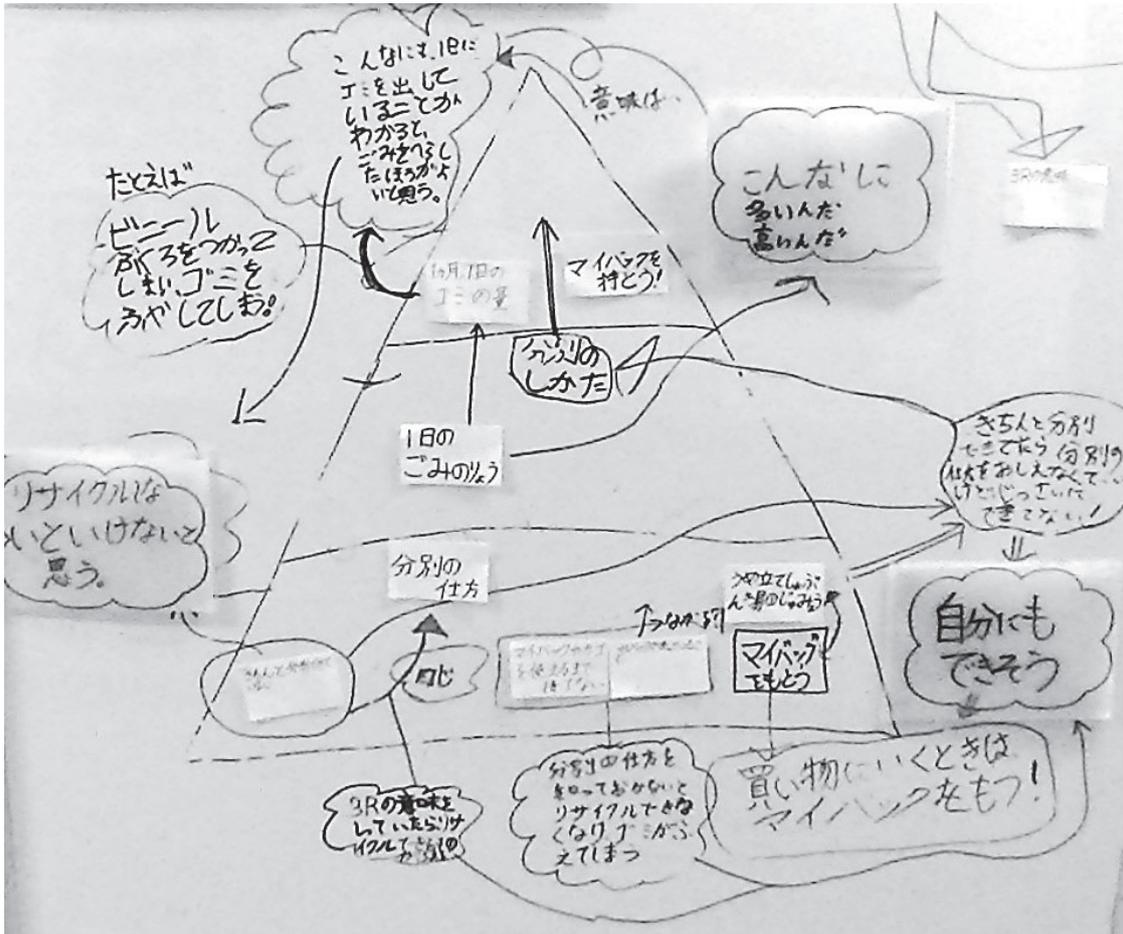


図10 中学生グループのホワイトボード

このグループは、中学生がもつ意識や考えについてイメージがもちにくいためか、どのようにまとめていくかに戸惑っていた。そこで、互いの広報内容を「比較し、仲間分けする」ことを中心に行っていた。その結果、1か月、1日のごみの量やごみを処理するのにかかる費用に関する情報は、「『こんなにも多いんだ、高いんだ』と驚くようなもの」、そして、マイバッグや分別の仕方に関する情報は、「『自分にもできそう』と相手に思わせることができるもの」と分類していった。このように、このグループでは、共通する見方・考え方を視点として見だしていったのである。

最後に、このように各グループで見いだしたものを全体場で交流し、課題解決に必要な視点としてまとめる場を設けた。そのときに用いたのが、図11のファイルカードである。クリアファイルをホワイトボード代わりに使うことで、色画用紙を用いて、子どもたちが書いたものを色別に分類していくことができた。

その結果、大きく二つのグループに分類されていった。一つは、「相手が、『やらなくては』と感じる現状や問題」、もう一つは、「相手が『やりたくなる』リサイクルのよさや楽しさ」である。このように共通のものをまとめ、視覚的に分かりやすく分類を行っていったことで、他グループから挙げられた視点との共通点や相違点に気付き、自分たちの見方・考え方の特徴をとらえることができた。

実際に、このときには、「ぼくらのグループは少し違う視点かもしれない。」と語るグループが現れた。「ぼくらも、やらなくてはと思える情報を伝えるとよいと考えたけれど、努力されている方の思いや願いを



図11 ファイルカード

伝えるという意見も出ました。」と語ったのである。この発言に、子どもたちは、「確かに、ぼくも、エコパークで一生懸命に働いておられる方の姿を見て、ごみを減らさなくてはいけないと思えたな。」「わたしは一緒にがんばりたい!と思えたから、やりたくなるという気持ちの方が近いと思ったよ。」と、どちらの視点に当てはまるかということを議論し始めた。そして、どちらにも当てはまる部分がある、三つ目の視点として残すことが決まったのである。

視点を見いだした後、再度、自分の広報内容の計画を見直す時間をとった。ある子どもは、「わたしは、できていないことや問題ばかりを選んでいただけで、自分たちが取り組んできた努力や思いも伝えたいと思います。」と語った。かかわり合いの中で協同的に見いだした視点を生かし、今後の活動の方向性を主体的に定めていく子どもの姿をみることができた。

2-2-5 第四次：第二回エコフェスタを開き、活動を振り返る

子どもは、第二回エコフェスタに向けて準備を始めた。幼児や1・2年生に伝える子どもは、図12のように、絵本や紙芝居で、中学生や地域の方に伝える子どもは、新聞やポスターに、「ごみを減らそう」と思ってもらえる情報と、自分たちの思いや願いをまとめていった。

また、活動の途中には、光市役所の方からお誘いをいただいて、夏休み中に行われた光市「ひかりエコフェスタ」にも参加し、図13のように、「一緒にごみを減らしていきましょう。」という思いや願いを伝えることができた。そして、子どもは、これまでの活動を以下のように振り返った。



図12 保育園訪問の様子

これまで、どうでもよいと思っていたごみ問題が、とても大切なことのように感じられるようになりました。今は、使って、使って、使って最後まで使うようになりました。

けれど、生活をしていたら必ずごみが出てしまうし、自分のできることは小さなことしかなくて、これからも続けていかなくてはならないと思っています。



図13 ひかりエコフェスタの様子

子どもたちなりに、活動に達成感を感じながらも、ごみ問題に立ち向かっていく難しさや、継続していくことの必要性を実感したようだ。

実際に、11月に行われた附小祭では、自分たちのお店で使うものにはもったいないものを用いて再利用活動を行い、祭り終了後には、4の1ごみステーションとして、全校のごみの分別作業を、子ども自らが計画し、実行することができた。

今回、友達と語り合いながら、自他の見方・考え方の違いに気付き、それらをつなぎ合わせながら、課題解決に必要な視点を見いだすことができた子どもたちは、より納得のできる答えを主体的に判断していくことができた。協同的に学ぶことの意味を見だし、語り合うことを進んで行うことができるようになっていく。しかし、グループ内における個の変容やその背景を見取ることが難しい場面もあった。今後は、一人ひとりの学習の状況や成果を適切に評価する方法についても考えていきたい。

おわりに

田村(2015)は、これから求められる人材は、「熟考し適切に判断する人」「新しいアイデアを創出する人」「他者と力を合わせよりよいものを創出する人」(p.11)であると述べている。「思考ツール」は、子どもたちが、そのような人材へと成長し、自分や社会の未来を切り拓いていくために必要な手段であると考える。

「思考ツール」を多様に身に付けていくことで、子どもたちが向き合い、解決していくことができる課題の幅も広がっていく。それだけでなく、一つ一つの課題に対して深く、多様な視点から分析できるようになり、分析したことをもとにして、「自分なりの応え」を導き出していくことができるようになる。まさしく、

「熟考し適切に判断する人」へと成長していくことを促していくのである。

また、「思考ツール」は、答えなき時代と言われ、既存の考えや価値観だけでは解決できない課題と立ち向かわねばならない現代社会において、新たな価値を生み出す推進力を生むための術となる。まさしく、「新しいアイデアを創出する人」へと成長していくことを促していくのである。

さらに、「思考ツール」は、個としての学びを充実させるだけでなく、同じ課題と向き合っている仲間と仲間をつなぐツールともなっていく。共通の「思考ツール」を土台にして議論したり、一人ひとりが自分なりに選択した「思考ツール」をもとに分析・整理して見いだした気付きや考えをもとに議論したりするなどして、互いの思いや願い、見方・考え方をつなぎ、課題解決にふさわしい考えや方法を導き出していく。まさしく、「他者と力を合わせよりよいものを創出する人」へと成長していくことを促していくのである。

しかし、「思考ツール」は、あくまで課題解決の手段である。それらを活用して自分や自分たち、同じ課題と向き合っている仲間が得た見方・考え方、生まれた思いや願いの自覚化や、創造した考えや活動によって、自分や仲間、社会が変容した筋道をとらえていく力の獲得こそが、自分や社会の未来を切り拓いていくためには必要であると考え。社会に及ぼした影響や自己有用感、自分の成長などを実感できるからこそ、「思考ツール」や得た見方・考え方が有効なものとして蓄積され、今後も必要感に応じて、活用が促されていくのである。そのような実感の伴った探究のサイクルが繰り返されていくことで、子どもが目の前の課題を自分ごととして引き受ける姿勢や態度を身に付け、自分や社会の未来を切り拓いていくという意志をもち続けることができるのではないかと考える。

今後も、子どもたちが自分や社会の未来を切り拓くことができるようになるために必要な学びの在り方について模索していきたい。

注

- 1) 筆者藤上真弓は、平成13年度から20年度まで、山口大学教育学部附属光小学校に勤務する。
- 2) 筆者國重裕美は、平成27年10月30日に第24回全国生活科・総合的な学習研究協議会香川大会（於：高松市立屋島小学校）の課題別分科会「主体性部会（総合）」において、「未来を切り拓いていく子どもの育成～協同的に課題解決に取り組み、主体的に判断していく、第4学年の実践を通して～」というテーマで、本実践事例について口頭発表した。

引用・参考文献

田村学：「授業を磨く」，東洋館出版，p. 11，2015.

田村学・黒上晴夫：「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」，小学館，2013.

中央教育審議会初等中等教育分科会：「教育課程部会教育課程企画特別部会論点整理」，2015.

文部科学省：「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」，東洋館出版社，p. 13，2008.

文部科学省：「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」，教育出版，p. 35，p. 36，2011.